

特集にあたって

鈴木 正 美

新潟大学コアステーション「〈声〉とテキスト論教育研究センター」では、〈声〉に関する国際的かつ領域横断的な共同研究体制を整え、26名の構成員がさまざまな研究活動をしている。また、2018年度はセンター主催・共催による公演・講演を次のように開催した。

(1) 2018年5月11日、会場：新潟大学附属図書館ライブラリーホール。映像作家エリック・ワットの作品『遠ざかる』L'Éloignement 上映会。エリック・ワット氏はフランスの映像（ビデオ）作家。ナント市を拠点に活動し、数多くのパフォーマンスビデオを制作している。新潟市と姉妹都市であるナント市から来日した。ビデオ作品『遠ざかる』は、3台のビデオプロジェクターを使った、二人の出演者によるパフォーマンスである。1ヶ月のトルコのイスタンブールでの滞在で、エリック・ワット氏は、「異邦人に」なろうと試みる。読み書きも理解もできず、未知の大地と言語に浸るとき、何が生じるか、その体験を映像化した作品である。さらに、この作品と同じコンセプト（「異邦人になる」）で、新潟市と佐渡で作品を制作した。

(2) 2018年11月3日～11月11日、会場：ときめいと。阿部正広・亀倉芸・茅原登喜子・中川セツ子・深澤美枝子・本間恵子展。新潟を拠点に活動する作家6名による作品展示。会期中の11月4日、新潟の詩人たち（清水マサ、伊予部恭子、魚家明子、館路子、長澤忍）による朗読会を開催した。

(3) 2019年3月2日、会場：ときめいと。シンポジウム「浅井十三郎の詩とその生涯」。新潟在住の詩人・鈴木良一による基調講演「浅井十三郎の新潟市時代から上京まで」の他に鈴木正美と藤石貴代による研究報告を行った。詩人・浅井十三郎（1908-56）は新潟県北魚沼郡広瀬村（現魚沼市）にいながら、詩誌

「詩と詩人」「現代詩」を発刊したが、これら二つの詩誌は戦後日本の現代詩の拠点となっただけでなく、環東アジア地域やヨーロッパの詩人たちとの文学的ネットワークを築いた。しかしながら、浅井十三郎のこれらの活動は日本の文学史からはほぼ黙殺されている。浅井十三郎を研究することは日本文学史を塗り替え、新潟の文学を世界文学の視座から捉え直すことになるだろう。〈声〉とテキスト論教育研究センターでは、今後も浅井十三郎の研究を進めていく。

今回の「人文科学研究」のプロジェクト特集に寄せられた論文は次の通りである。

齋藤陽一の論文「結婚をモチーフとするチェーホフのヴォードヴィル——先行作品等との関係」は、ロシアの劇作家、チェーホフが、常々「すばらしいヴォードヴィルを書きたい」と願っていたということはよく知られていることであり、また実際に、数編のヴォードヴィルが残されているが、むしろ、晩年の『かもめ』から『桜の園』を生み出す助走としての作品と捉えられることも多いと考え、本論では逆に、チェーホフがヴォードヴィルを生み出す過程を「結婚」をモチーフとする作品を例に考察している。

鈴木正美の論文「短波放送からの〈声〉——「雪どけ」期のジャズと大衆歌謡（2）」は、1957年の第6回世界青年学生フェスティバルで西側の文化がソ連の一般市民に公開され、ジャズが公認化されるまでの経過について述べている。さらにトランジスタ・ラジオの普及と短波放送、とりわけヴォイス・オブ・アメリカにおける音楽番組「ミュージックUSA」が1950年代後半のソ連でジャズの聴取の仕方を変え、多くの音楽家を育てるきっかけになるまでを考察している。

鈴木孝庸の論文「平家語りと聴かせどころ」は、平家語りが物語り全体を語り伝えることを基本としながらも、時代が降ると、俗耳に入りやすい章段なり、印象的な行文のひとふしなりを語るように変質していったと考え、そうした「聴かせどころ」を抜き出し編集したかと思しき『平曲中音集』を翻字墨譜つき影印で紹介している。